



☆☆ニュースレター☆☆

第104号
発行日:2012. 11. 19
(since 2006.2.1)

このニュースレターはメールを登録している正会員および賛助会員(除く:企業内会員)ほか当団体が了承した希望者に、随時配信しております。配信中止を希望のかたは右記までご連絡ください。

NPO 法人・クライネスサービス

会長:稲垣 正彦

発行責任者:事務局長・眞柳 和俊

千葉県佐倉市宮ノ台3-2-2

npo-kleines-463@catv296.ne.jp

TEL/FAX:043-463-1337

<http://www.catv296.ne.jp/~kleines/>

◎青色回転灯講習会: 11月14日(水)佐倉警察署から講師2名においでいただき、青色回転灯講習会が開催され、更新者16名、新規申請者2名の18名が受講しました。

会員寄稿 -24- 「東京ステーションホテルに宿泊して」 -中川清徳-

JR東京駅。その丸の内側の赤レンガ駅舎が、5年にわたる「復原の大工事」を終え、堂々とした外観を現した。1914年(大正3年)12月に創建された建造物だが、オリジナルの姿が見られるとあって東京の新しい観光スポットになることだろう。

日本銀行本店など著名な建物の設計者である明治建築界の第一人者、辰野金吾が日本の威信をかけて造り上げたルネサンス様式の外観を持つ西洋風の駅舎である。重厚で風格あるたたずまいが素晴らしい。南北2か所の塔屋ドームが際立った特徴になっており、ドームの内部は吹き抜けで、鰻(こて)仕上げの壁面や、さまざまなレリーフを見上げるのも楽しい。当時の高度な左官の技法に感じ入る。駅舎の屋根に葺かれているのは、宮城県石巻市雄勝(おがつ)地区で産出される天然石のスレートである。出荷直前、3・11大地震に遭遇し、製品の多くが津波に呑み込まれてしまったが、地元総出で拾い集めて何とか竣工に間に合わせたという。

駅舎の中央部から南寄りの2階と3階には「東京ステーションホテル」が入居している。創業が1915年(大正4年)であり、当初は鉄道省(当時)直営で、「東京鉄道ホテル」の称号でスタートしたという。戦災で建物が焼失したあと1951年(昭和26年)に営業を再開し、都心にあるユニークなホテルとして最近まで活躍してきた。内田百閒、松本清張などレールを題材にした文人たちが、このホテルを常宿にしていたことで知られる。

私はかつてこのホテルに何度か泊まったことがあり、思い入れの深いところだ。ここを利用したのは仕事の利便を考えてのことで、東海道新幹線の始発列車に乗り日帰り用を済ませるのに、まことに好都合なロケーションだった。丸の内駅舎のふくげん復元に合わせ、完全リニューアルのホテルが再び営業を始めるのを知り、昔を偲んで予約を入れてみた。しかし人気が高く、連日満室とのことだった。幸いオープン間もない日曜日に部屋を取ることができたので、早速妻を伴って少しばかり気持ちを高ぶらせながらチェックイン。当日は休日の故か、やや手狭なフロントロビーは宿泊客に加えて見物人で溢れかえっていた。宿泊した3階の部屋は皇居側に面しており、縦長の窓からは左手に東京中央郵便局、正面に丸ビル、右手には永楽ビルを目の当たりにできる。どれも歴史的建物だが、今では超高層ビルに衣替えしてそびえ立つ。

ベッドはシモンズ社製の大型サイズで寝心地満点だ。部屋の造作はシンプルで、白を基調とした額縁仕上げ。清楚だが気品がある。ビジネスホテルさながらだった旧ホテルとは様変わりの印象だ。近頃オープンする都市ホテルはどれも現代感を強調したデザインだが、私はこのステーションホテルの雰囲気の方が好きだ。ホテルの係に確認したところ、「内装や家具は全てイギリス人デザイナーの手によるもので、ヨーロッパアンティークしつらいで統一しています」と、得意気な答えが返ってきた。駅舎中央部の三角屋根の中はホテルの朝食会場になっており、吹き抜けを利用した広い空間には大屋根から差し込む太陽光が満ちて開放感がある。朝食はとても快適だった。

丸の内駅舎は有形文化財に指定されており、復元されたとは云え新築ではない。しかしホテルは最新の機能を備え、セキュリティも確保されている。このホテルが質の高さで評価されることを期待したい。

(平成24年11月11日、記)

